

緑爽会会報 No. 184

2023年2月27日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

千駄ヶ谷富士と文京区の富士塚巡り

小林 敏博

1月の山行は山歩きではなく、都内渋谷区と文京区の富士塚を巡った。

富士塚とは、富士講中興の祖といわれる食行身禄（じきぎょうみろく）の教えが江戸時代中期以降、市中に広まり、富士山を信仰の対象とする人たちが富士山に模して築いた塚で、現在も都内にはいくつも残っている。当時は富士塚に登拝すれば、実際に富士山に登ったのと同じ御利益が期待できるといわれていた。

実施日：1月20日（金）

参加者：14名（下の写真参照「千駄ヶ谷富士をバックに」）



(後列左から) 小清水敏昌、富澤克禮、小林敏博、夏原寿一、川口章子、大島洋子、島田稔、荒井正人、横関邦子、(その手前) 辻橋明子、田村佐喜子、鳥橋祥子、(最前列左から) 有岡純子、石塚嘉一

集合場所は千駄ヶ谷駅。松本から参加された田村さんが重いからと言いながら松本土産の白い粉のついた美味しそうな干し柿を皆さんに配っていただいた。さっそくひとくち食べると甘い懐かしい味が口の中に広がる。

今日は人通りの多い道を歩くので、石塚さんに最後尾から皆さんを見ていただくようお願いする。全員集まり 10 時 20 分にまず千駄ヶ谷富士へ向かう。千駄ヶ谷富士は駅前左手に新しい東京体育館を見ながら 5 分ほど歩いた鳩森八幡神社にある。北側の参道から境内に入ると左に大きな岩山が目に入る。先頭を歩いていた富澤さんが「まずはお参りをしよう」と拝殿へ向かう。皆さんも拝殿でお参りした後、先ほどの岩山へ戻る。

千駄ヶ谷富士は都指定有形民俗文化財で、掲示には『寛政元年（1789）の築造といわれ、…築造当時の旧態をよく留めており、東京都内に現存するものではもっとも古く』とある。富士塚は高度成長期の時代に駐車場を造るなどつまらない理由で移築、廃棄されたものが多い中では見応えのある塚である。

鳥居をくぐって案内に従い登拝する。四合目には里宮、七、八合目には烏帽子岩と身禄像、黒ボクという溶岩で被われた急坂をひと登りすると奥宮のある山頂。山頂には金明水、銀明水まである。比高 6m だが、周りを眺めるとかなりの高度感を覚える。皆さん、じっくりと展望を楽しんだ後、下山した。

千駄ヶ谷駅に戻り、JR・東京メトロと乗り継いで護国寺駅へ向かう。護国寺駅から地上に出ると、目の前が音羽富士のある護国寺である。護国寺は五代将軍綱吉の生母・桂昌院の発願により開かれた。入口にある、戦争でも被災しなかった仁王門が豪壮だ。広い境内をまずは元禄時代に建てられたという本堂へ向かう。参拝後、入口東側にある音羽富士へ向かう途中、朱塗りの門をくぐって石段を下りようとしたら、「ここで写真を撮りたい」という声が挙がり、門を背に集合写真を撮る。改めて朱塗りの門を見上げると、『不老』との扁額が掲げられていた。意味は分からぬが、われわれにとっては似つかわしい。

文化年間、本堂西側に築かれた音羽富士は明治になって今の場所に移築されたという。鳥居をくぐり抜け、一合目の石碑のある道から山頂へ登る。山護講という富士講の石碑が斜面にいくつもあ。山頂には木之花咲耶姫（このはなさくやひめ）を祭神とする浅間神社が祀られている。比高 6 m の山頂からの眺めを楽しんで下山する。

護国寺を後にして富士見坂を登り、春日通りを南東へ向かう。文京区というだけあって、通りの左右にはお茶の水女子大学、跡見学園、筑波大学などと学校が多い。小石川植物園を目指して先頭を歩く私の脇を歩く大島さんが「桜の播磨坂を下るのですか」と聞かれたので「よくご存じですね」と応えた。「富士塚は普通、神社にあるけどお寺にある富士塚は現在、都内では護国寺だけだそうで、世田谷区の森巖寺にもかつてあって、5、6 年前に近くの八幡神社に移されたそうです」と話すと「森巖寺は近くなのでいくども行っています。針供養にも」とお応えになり、都内をいろいろとご存じのようなので今度案内していただきたいな、などと思う。

播磨坂を下り、路地を進むと小石川植物園である。「入口の前のよく分からない店で入場券を売っていたな」と富澤さんが話す。鳥橋さんも「そうそう」と。そういえばかつてはそうだったなと思ひ出す。その店はまだ健在だが、現在は植物園入口には立派な入場券売場がある。園内に入り、舗装の坂道をひと登りすると陽差しに溢れた草地の広場がある。そこで昼食休憩にする。その後、公開温室ではあまり見ない熱帯・亜熱帯の植物を、園内ではぐりとさまざまな樹木を観察した。

植物園を出て、園の堀に沿って御殿坂を上がり蓮花寺坂を下ると白山下である。広い白山通りを

北へ少し歩き右手の路地へ入ると白山神社入口の石碑が建っている。裏参道の石段を上がって進むと目の先が白山神社の拝殿となる。

皆さんが拝殿の前で順次お参りをした。拝殿の横には東京では珍しい松尾神社もある。松尾神社は渡来人の秦氏の氏神で、秦氏が酒造りにもたけていたことで祭神は醸造祖神として崇められている。それを聞いて、酒好きの有岡さんは「ぜひお参りしないと」と足を向けた。

白山富士は古来あった小さな祠を文化年間に富士講信者により再建されたが、その後廃れて昭和51年に紫陽花を植えて造園された。社殿の脇を通り過ぎると白山富士があるが、金網で囲われて登ることはできない。金網越しに紫陽花で植栽され、講碑もない小山を見る。また、社殿裏に移された山水講の2つの講碑をぐるりと回って見に行く。

白山富士を後にして表参道から白山駅前の賑やかな商店街を進み、本郷通りから寺町のような通りに入ると食行身禄の供養所がある海蔵寺に着く。海蔵寺は身禄の次女・まんの嫁ぎ先黒木家の菩提寺で、まんが富士山七合五勺で入定した身禄の詣り墓をここに築いたといわれている。黒ボクで被われた、2mほどの小山に身禄山と刻まれた大きな石碑が立っている。

本郷通りに戻って北へ進むと、20分ほどで寛永年間に本郷から遷座された駒込富士神社だ。前方後円墳といわれる小山が駒込富士で、その上に社があり石段の周りにはこの地に多かった火消しにより組織された富士講の講碑がいくつもある。社まで上がりお参りをして社の周りを巡ったりした。「一富士二鷹三茄子」という川柳はここが発祥の地ともいわれている。一富士が駒込富士らしい。

ここから本郷通りを20分ほど歩くと駒込駅である。計画では午後3時に駒込駅に着く予定であったが、昼食時間をたっぷりとり植物園内をじっくりと歩いたので駒込駅到着は4時過ぎとなった。午後4時は開店時間の早い店が開く時間だ。すでに開いている駅前の飲み屋を見つけて島田さん、田村さんを囲んで反省会を楽しんだ。
(写真提供：石塚嘉一)

〔行程記録〕千駄ヶ谷駅 10:20→10:25 千駄ヶ谷富士（鳩森八幡神社）10:45→10:50 千駄ヶ谷駅⇒（JR・東京メトロ）⇒11:15 護国寺駅→11:20 音羽富士（護国寺）11:45→12:35 小石川植物園 14:25→14:45 白山富士（白山神社）14:55→15:10 食行身禄供養所 15:20→15:40 駒込富士（駒込富士神社）15:50→16:10 駒込駅

富士塚めぐりに参加して

有岡 純子

大寒の1月20日、10時に千駄ヶ谷駅に着くと、立っているだけなのにまったく寒くはなく、晴天のあたたかな日でした。富士塚めぐりは、実は以前にMCCで行ったことがあるのですが、その時は仕事帰りの夜だったため、ヘッドンを点けた怪しい集団でした。今回改めて昼に行ってみると、細かい部分もよく見えて、だいぶ印象が変わりました。

一番印象に残ったのは、小石川植物園です。初めて行ったのですが、都会にこんなに自然が残っているとは驚きました。近いのでぜひまた、訪れたいと思いました。

反省会の後、さらに松本からお越しの田村さん達とご一緒に楽しい時間を過ごしました。いつものことながら、歩いている時間より飲んでいる時間のほうが長かったりして？

私が緑爽会の行事に参加するのは、昨年の高尾山新年山行、7月の暑気払いに続いてまだ3回目なのですが、今回が一番いろいろな方とお話できたと思います。だんだんと皆様の顔と名前を憶えていきたいと思います。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

緑爽会創設の頃の会員の思い出（１）

関塚 貞亨

松本さんから「亡くなった会員のことを書いてください」と依頼があったので、先ず織内さんと國見さんを書いた。以降は順次、他の人も取り上げたい。

◎織内信彦(1912年～2002年)

織内信彦さんは、私の山岳会入会を誘ってくれた人で、最初にお会いしたのは1976年6月のウェストン祭。場所は山岳研究所であった。

案内人組合の跡地を日本山岳会が引き受けて、古い木造建ての建物が、山岳研究所になってから、上高地を訪れる度に、良い場所に日本山岳会は宿舎を持っているなど思いながら、私にとって山岳会は遠い存在だった。

ところが1974年5月始めに開所したばかりの2代目山研の管理人だった津村夫妻と明神池で会い、どうしたことか新築したばかりの山岳研究所に連れていかれて、手打ちそばをご馳走になった。そのことが縁で上高地を訪れるたびにお菓子や果物を差し入れ、お昼をご馳走になったりしていたが、その頃の私の定宿は村営ホテルで、研究所に泊まったことは一度もなかった。



1976年6月の第一土曜日は、たまたまホテルは満員で、支配人が一緒に寝ようと言ってくれたが、何となく気が進まず、津村さんに電話したところ「空いているからいらっしゃい」ということで、初めて泊まることになった。そこに副会長だった織内さんと常任評議員の折井健一さんがいて、隅の床に立正大学の宇田川芳伸さんがいたが、私は図々しく机の向かい側に座った。

そして重鎮のお二人と話しが弾んで、お二人も面白がって消灯時間が過ぎ12時近くまでになった。いま考えると冷や汗ものだが、そして翌朝私が去った後、津村さんから会員ではないと聞かされたお二人から『山岳会に入れろ』ということになった。

送られてきた入会申込書には「主なる著書」という項目があり、著書もない私はしり込みしていたが、再びお会いした折井さんから強い勧めもあって、1年後の1977年7月に入会することになった。入会した7月に織内さんは中東に主張中で、推薦人は折井さんと三水会代表の沼倉寛二郎さんになった。山岳研究所委員長だった折井さんの推薦で委員になり、入会した三水会で素晴らしい先輩たちとお付き合いすることが出来たのは望外の喜びだった。山研委員は水道の配管や、電気工事の知識も必要で、私のような不器用な人間には議事録を作ることぐらいしかなく、後任に坂本正智さんを推薦して入会2年目で御役御免となった。そして念願の、織内さんが委員長だった自然保護委員となって、亡くなるまでの付き合いが始まった。

自然保護委員会は織内さんが名誉会員になり引退することとなって、渡辺正臣委員長、関塚事務局長という体制に引き継がれたとき、銀座のフレンチ・レストランでご馳走になったことも懐かしい思い出だ。そして奥様が亡くなられた後、家を整理され三鷹のホームに入られてからも自然保護委員の横山隆さんと訪ね近所の中華料理店で北京ダックをご馳走になったこともあった。

織内さんの一番の自慢は山岳会入会の推薦人が小島烏水だったこと、またそのお二人の交流が烏水の亡くなるまで続いていたことだった。私が入会した1977年当時の織内さんは、友達にも恵ま

れていたと思う。三田さんを中心に島田巽さん、小原勝郎、晴子夫妻、医者 of 河野幾雄さん、運転手役の金坂一郎さんのメンバーで低山歩きを楽しんでおられた。

◎國見利夫（1925 年～2014 年）

國見利夫さんが生まれたのは私より 6 か月後だが、未熟な私と違って大人の風格があった。共通点と言えば偶然だが、連れ合いが湘南高女の同期生だった。そのほかの事柄では微妙なことですれ違いが多かったのは残念というほかない。

自然保護委員は私が委員になる 5 年以上前、渡辺公平さんが委員長時代からの大先輩であったが、どういうことか後輩の私が、今西壽雄会長の下で自然保護担当理事となって、池田剛委員（国立公園協会勤務）など先輩委員に助けられたのは有難いことであった。



理事就任当時の自然保護委員長は渡辺正臣さんだったが、間もなく國見さんと交代、國見委員長、関塚理事の時代が 3 年以上続いた。國見さんは日山協でも自然保護委員だったから、山岳会の自然保護委員会が毎年 9～10 月に行う全国集会の 2 週間か 1 か月前に日山協も全国集会を開いていて、テーマも開催場所も同じではなかったと思うが、地方の岳連の自然保護委員は日山協の集会に出席する人が多く、必然的に山岳会の全国集会への支部委員の出席が少なかった。そのような事情は私の理事任期終了後にある支部委員に聞いた。國見さんの心境は微妙なものだったと思う。

私の理事任期が終わる 1989 年に國見さんも衆議院書記局を定年退職するので、後任の理事候補になるよう推薦、理事会の議事は順当に進んでいたが、日山協会長が、有能な國見さんの定年を待って、常勤の事務局長にスカウトしたため、山岳会総会の 1 か月前になって、村木潤次郎副会長が「日山協事務局長は忙しい、山岳会理事の兼務は無理だ」と難色を示して別の候補を求めてきた。そこで山田二郎新会長の大学の後輩で自然保護委員会事務局の松本恒廣さんを後任理事に推薦した。松本さんが 2 年で理事を辞め、後任に大森弘一郎さんが就任した。

日山協の事務局長で猛烈に忙しかった國見さんが 70 歳になって、事務局長を退任すると HAT-J の田部井淳子さんが「ヒマラヤ・トレッカーのごみ処理のためルクラに焼却炉を設置したが、現地人が扱いたないでゴミが山積みのままになっている。現地へ行って処理してくれ」と頼まれ、現地人を指導して処理している。

緑爽会の名付け親は渡辺正臣さんだが、同好会としての山岳会への申請文の作成と代表としての届け出は國見さんで、また発足時は自然保護委員が中心であったが会の目指す方向は「自然保護にこだわらず、山岳会設立の趣意書を引用してクラブ活動の本道を行く」としたのは卓見で、日本山岳会が公益法人になって、本来の親睦団体としてのクラブ活動から遠のいている現状からみて素晴らしいことであった。

國見さんが亡くなられて通常なら『山岳』の追悼欄に載ることになるが、松本さんなど緑爽会メンバーの要望で『山岳』第 110 年（2015 年発刊）の本文に「山脈・人脈一歩いてきたみち」と題して亡くなる 1 年半ほど前に緑爽会で講演した話が 16 頁にわたって追悼欄に代わって掲載された。掲載を承認してくれた当時の理事の節田重節さんに感謝したい。『山岳』第 110 年の國見さんの見事な山人生を読んでほしい。

明治～大正の飯田町・富士見町界限

南川 金一

百年という時間は、人の世代で2～3代。3代前となると祖父母の時代である。運がよければ祖父母の元気な頃の思い出を持つことができるが、それも年寄りになってからのものである。祖父母の働き盛りの頃の話となると、普通は親を通じての情報にならざるを得ない。身内のことであるから、部分的ながら伝わるのであって、社会一般のことは記録によらなければ伝わらない。百年というのは、そのような時間であって、百年前は近いようでありながら遠いものである。山岳会の百年史と取り組んでいて、感じさせられたことである。百年ほど前の話題を幾つか――。



付録として別添の地図は国土地理院発行の1万分1「新宿」と「日本橋」を合わせた千代田区飯田町・富士見町のあたりを150%ほどに拡大したものである。発行は20～30年ほど前なので、建物・施設名はかなり変わっている。また、明治～大正の頃とは住居表示も変わっている。

このあたりは発足した頃の山岳会とかかわりが深かった。地図の左下から北東へ、さらに東へ向かっているのはJR中央・総武線で、①は飯田橋駅西口。②は山岳会発祥の場所である富士見楼があった場所である。明治40年の地図では、現在の飯田橋と水道橋の間に当たる③の場所に甲武鉄道飯田町駐車場があり、中央線沿線の山の紀行文には始発駅・飯田町駐車場から乗車する場面が描かれている(④)。

飯田町二丁目の首都高速の下は日本橋川で、川を背に稚松(わかまつ)尋常高等小学校があった(⑤)。山岳会の母体であった博物学同志会は、この学校で総会や集会を開いていた。梅沢親光の父親が校長で、梅沢の家は飯田町二丁目31番地、現在の九段北1丁目(⑥)だった。九段通りの南側、当時の富士見町一丁目29番地(⑦)に富士見軒というフランス料理店があり、明治42年1月16日と9月5日、山岳会の有志晩餐会が開かれている。

武田久吉の家は旧・富士見町四丁目6番地、現在は法政大学の一角になっている(⑧)。武田久吉は富士見小学校に通った(⑨)。したがって、このあたりには山岳会設立発起人の7人のうちの若手の二人がいて、都心という有利な条件を生かして、山岳会のために目覚ましい働きをした。

山岳会の事務所は日本橋区室町三丁目11番地の城数馬の弁護士事務所に置かせてもらったが、城が韓国へ赴任することになったので、1909(明治42)年から横浜の高野鷹蔵宅に移った。高野が病気になり、1919(大正8)年10月、武田久吉宅に移された。その頃について、武田久吉は「日本山岳会の事務所が急遽私の家に移り、…相談相手は手近な所に住んでいた梅沢君と、本郷の木暮君とであった。梅沢君は専ら会計の方をやり、木暮君は編集主任ということにし、私は庶務を掌った」(『アルプ』88号、「木暮君と私」)と書いている。ただし、大正9年の名簿では、梅沢の住所は牛込区矢来町3である。会は同年8月の規則改定で、翌年4月から会員番号制を導入し、会費計算方法を変更することとした。約七百人の会員番号の決定と番号を刻印した新会員章の送付、それまで入会月から1年間であった会費を年度会費とすることによる既納額との差額計算と請求という膨大な事務が発生した。『山岳』に載った梅沢親光の追悼文には「梅沢君はこの時にあって驚くべき短時日内に、会費の改算をはじめ、…会員章の変更を断行するなど、寸暇もなく活動された」とあるが、執筆者名がない。その執筆者は武田久吉以外には考えられない。梅沢の働きを讃えるも、後に述べる会員番号の決定や新会員章の送付、ABC順名簿の作成など、時間を要する膨大な会務を自分がこなしたことについては何も語っていない。

百名山への素地、そして百名山以後

小原 茂延

一昨年没後 50 年で『山岳』、会報『山』その他で諸氏が深田久弥にまつわる思い出やエピソードを綴っておられた。その生涯が 68 年であったのは何とも惜しまれ、本人も家系的にも長寿で病気一つしていない健康ぶりを語っていただけに、あと 10 数年でも寿命があったら、どれほど山岳文学の精髓を見せてくれたかと悔やむのは登山家のほぼ一致するところと思う。

気が付けば生誕 120 年である。深田久弥はご承知のとおり、明治 36 年 3 月 11 日に石川県江沼郡大聖寺町字中町（現 石川県加賀市大聖寺中町）に生まれている。この年は岡野金次郎が 1 月下旬に W・ウェストン師の著『日本アルプスの登山と探検』を偶然発見して、小島烏水に報告、これが日本山岳会設立への契機となった記念すべき年でもあり、奇しき因縁を感じるものである。事実その後、久弥 11 歳の時に大聖寺学生会の催しで登った富士写ヶ岳でその健脚ぶりに「強い坊だ」とほめられ、山に親しむきっかけになったという。その頃、少年雑誌に投稿して入選しているというから文才の片鱗も見せている。旧制福井中学時代も石川・福井の山に親しんだ一方、石川啄木の詩に親しんだりする文学少年であった。これは正に小島烏水の『文庫』投稿から記者時代の文学少年に相通じるものである。

地元の稲坂謙三らによる登山の手ほどき、一高時代の登山の師ともいえる田辺和雄（旧姓濱田）先輩の指導で登山に明け暮れ、同時に作家への道を目指し且つ俳句にも親しんでいる。

日本百名山へたどり着くまでの久弥は、改造社勤務を経て作家として知られるようになり、小林秀雄や今日出海などの知遇も厚くなっていったが、最初の妻である北畠八穂との共作問題などが世間の耳目を集め鎌倉を離れる。それから兵役を挟んで越後湯沢・大聖寺・金沢と居を変えて昭和 30 年に東京世田谷の松原に移り住んだ。

登山にかける情熱は数々の山岳紀行文を生み、『日本百名山』で読売文学賞を受賞したことは多くの登山を愛する人々から祝福されたが、評論家の小林秀雄をして「深田に山があってよかった」と言わしめている。同じく同書を激賞した林房雄などかつての友の力もあった。また、高辻謙輔氏の著で知ったが、新宿三越から見える山岳を指呼し、その山の向こうに隠れている山まで知っている、と驚愕した井伏鱒二が時事新報に『東京新風景』の一景として書いているエピソードなど、山一筋の深田久弥を伝えてあますところがない。

『日本百名山』の後記にあるように、久弥自信が登っていないとの理由で選定から漏れた山々もあったわけで、そうした山には申し訳ないとまで書いている。とりわけ北海道のニペソツ山（2013m）はその中でも惜しまれる山であった。それを知った帯広エーデルワイス山岳会（当時）の滝本幸夫・平野明両氏が、「じゃ登ってもらいましょうか」と招聘し、案内したのは昭和 40 年 8 月のこと。その折、深田はかの山岳画家坂本直行氏とも再会している（山行には参加せず）。滝本氏（元 JAC 北海道支部長）が、その著『私の中の深田久弥』のあとがきに「久弥の容貌が好きだ。物腰が好きだ。精神が好きだ。文章が好きだ。山を彷徨する姿勢が好きだ。…」と書いているが、深田久弥の人となりが彷彿としてくる。



+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ◆ + + + + +

チョウが冬に羽化！

荒井正人

石塚さんに触発されたわけではないが、孫が昆虫に興味を持っているので、テレビ番組「昆虫すごいぜ！」なども一緒に観ていた。夏には私が仕事場で見つけたカブトムシを昆虫籠で育てたし、家内ともども昆虫が気になって仕方がなかった。そんな暮れに、マンションのコンクリート階段でサナギを発見した。石塚さんに聞いて上手く取り外し、紙でポケットを作ってその中に入れ、家の中で育てることにした。寒い時期だからと、陽の当たる出窓に置いて孫が毎日観察した。3月くらいになって羽化し、花の間を飛べるといいね、などと話していた。

ところが1月29日、羽化していたのだ！その瞬間を見ることができなかったのは残念だったが、外に放したら直ぐに寒さで死んでしまうから、部屋の中で育てることになった。また石塚さんにご助言をいただき、家族で頭をひねり、洗濯籠の周囲を発泡スチロールで巻いて保温性を高め、上に空間が出来るようなネットをかぶせた。砂糖水を吸って徐々に元気になったか、時折羽をばたつかせている。暖かくなって飛翔する姿を見たいねと孫は目を輝かせた。(つづく)

～ 《予告など》 ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

3月山行「鐘撞堂山」

秩父鉄道 桜沢駅から波久礼駅まで、八幡山経由で鐘撞堂山を登る8kmほどのハイキングです。駅から歩ける手ごろな山ですが、雑木林のなかを心地よく歩ける気持ちの良いコースで、天気良ければ秩父の山々のつながりを見ることができます。五百羅漢の並ぶ道をのんびりと歩いてみませんか。

実施日:3月15日(水)雨天中止

集 合:10時 秩父鉄道 桜沢駅 (八高線または東武東上線 寄居駅より1駅)

桜沢駅への行き方の例: ① 池袋駅(8時発東武東上線 急行) ⇒ (9時03分着)小川町駅(9時14分発) ⇒ (9時30分着) 寄居駅 (9時43分発) ⇒ 秩父鉄道 桜沢駅 (9時46分着) ② 西武新宿線で本川越駅に行き、3分ほど歩いて川越市駅(8時30分発)から東上線に乗り換える方法もあります。

行 程:桜沢駅→八幡神社(登山口)→八幡山(210m)→鐘撞堂山(330.2m)(昼食)→羅漢山(215m)→少林寺→波久礼駅(歩行時間は 3～3.5 時間)

持ち物:昼食、飲料水、敷き物、マスク、雨具、ストックなど

参加申込:3月10日(金)までに下記担当者までお申込みください

藤下美穂子

横関 邦子



4月総会:現在日程と場所について検討、準備を進めておりますが、今の段階ではルームでの20名を超えるような集会は開催できない状況です。3月に入ってから、改めてお知らせすることをご了承願います。

―― 編集後記 ―――

24日、芳賀孝郎会員のお話を聞く会が開催されました。次号で詳細報告します。やはりこうしたリアルでの集まりが気兼ねなく出来るように、コロナの撤退を強く念じたことでした。(荒井正人)
立春、雨水が過ぎて1週間で啓蟄を迎えます。待っていた、ものみな目覚める季節が再びやってきます。3月山行は鐘撞堂山。木々の芽吹きを愛でに行きませんか。(小林敏博)

次号予告<4月25日発行の主な内容>

報告:芳賀会員のお話、3月山行 寄稿投稿:南川さん連載など